フィールド（現場）からの風 ㉑

宮田守男

避けて通れない少子化・高齢化社会で「生き甲斐」を持つ意識が大切だ

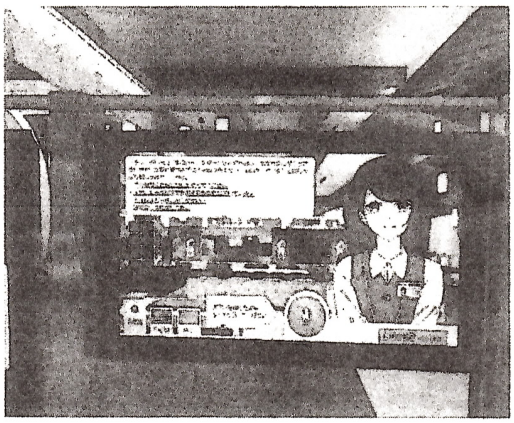
大北地域の田に水が張られ、昼は山並みや空を映し、日々暮らしている私たちを虜（とりこ）にしてくれる。しかし日が暮れればカエルの大合唱が当たり前だった環境が、カラスなどの食害なのかほとんど聞こえてこない。農道で話す会話も、イノシシやサルなどの話題で盛り上がる事も多く、自然界の激変が年を追うごとに切実になってきている。

人間社会も同様だ。3月には総務省が3月1日時点の人口推計で75歳以上が、初めて65歳～74歳を上回ったと公表、75歳以上の後期高齢者は、近年月5万人前後のペースで増加している。

また国立社会保障・人口問題研究所も2015年から2045年までの都道府県や市区町村別の将来推計人口を発表。総人口で2千万人減、市区町村では94％で人口減、15年を100とした指数で私達大北地域では、大町市が58・7、池田町が65・3、松川村が80・5、白馬村が70・7、小谷村が44・8になると推計。4月には、総務省が昨年10月1日時点の人口推計で、外国人を含む総人口は、7年連続減の前年から22万7千人減の1億2670万人と公表。5月の「こどもの日」を前に、総務省が発表した4月1日時点の、外国人を含む14歳以下の子供の数は前年から17万人減った1553万人、比較統計がある1950年以降過去最低を記録と発表。長野県では毎月人口異動調査に基づく4月1日時点の年齢別人口推計で、大北地域市町村すべてで、65歳以上が30％を超えていると発表。

「減少」・「減少」・「減少」と伝える情報が繰り返されているが、自身に降りかかる大きな現実と捉えている声が聞こえてこない。他人事のように「残りの人生・のんびり無事終わりたい」「若い世代に地域を委ねて行きたい」ではない社会構造が待ち構え、厳しい社会の中で人生を歩まなければいけない事を考える場面が待っているのだ。

人それぞれ終活を迎える時まで、社会の中で役割を持つ事が求められる時、どんな考えを持つべきなのだろうか。生かされているからこそ、「生き甲斐」を探し出す事が大切だ。人生を悔いなく生きるため、人に必要と考えてもらう事、人の役に立ちたいと考えてみてはどうだろうか。色々な人達と気軽に話をし、人との関わりを広げるために、社会参加の必要性が高まっている。まずは、勇気を持って一歩、自身の「生き甲斐」発見の旅に踏み出してみてはどうだろうか。（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）



松本のショッピングモール、入り口には3カ国語対応のAIが当然の様に案内業務する時代だ